

中屋遺跡9次

2011年10月

浜松市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は浜松市浜北区根堅において実施した中屋遺跡の発掘調査にかかる報告書である。
- 2 当発掘調査は携帯電話無線基地局の新設工事に先立つ事前調査として実施した。調査はKDDI株式会社の依頼のもと、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が行った。中屋遺跡の発掘調査は2000年度から断続的に実施されており（Tab.1）、今回報告分は第9次調査となる。
- 3 当発掘調査の期間は2011年9月15日から2011年10月30日までである。このうち現地発掘調査は2011年9月26日から2011年9月28日の間に実施した。調査面積は22m<sup>2</sup>である。
- 4 調査にかかる経費は、全額KDDI株式会社が負担した。
- 5 現地発掘調査、整理作業は首藤久士（浜松市文化財課）が担当した。
- 6 調査の記録、出土遺物は浜松市文化財課が保管している。
- 7 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 8 遺構の略記号は以下の通りである。 SP：小穴
- 9 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

教育委員会→教委　　静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研

Tab. 1 中屋遺跡における調査一覧

調査名	調査期間	調査面積	調査主体	主な時代
第1次調査 No.129地点	2000年9月29日～2000年10月31日	108m <sup>2</sup>	財静岡県埋蔵文化財調査研究所	中近世
第2次調査 No.130地点Ⅰ期	2001年5月17日～2001年10月26日		財静岡県埋蔵文化財調査研究所	中近世
第3次調査 No.130地点Ⅰ期	2001年11月5日～2002年7月18日		財静岡県埋蔵文化財調査研究所	古代中近世
第4次調査 No.130地点Ⅵ期	2003年12月18日～2004年1月26日		財静岡県埋蔵文化財調査研究所	中世
第5次調査 No.130地点Ⅸ期	2004年1月26日～2005年3月22日		財静岡県埋蔵文化財調査研究所	中近世
第6次調査 No.130地点XⅡ期	2005年4月18日～2005年6月6日		財静岡県埋蔵文化財調査研究所	古代中世
第7次調査 No.130地点XⅡ期	2005年6月1日～2006年3月22日		財静岡県埋蔵文化財調査研究所	古代中世
第8次調査 中屋遺跡確認調査	2002年6月20日～7月10日、10月14日～24日	188m <sup>2</sup>	旧浜北市教育委員会	中近世
第9次調査	2011年9月26日～2011年9月28日	22m <sup>2</sup>	浜松市教育委員会	中世
2011年 工事立会	2011年10月17日～2011年10月18日	26m <sup>2</sup>	浜松市教育委員会	中世

## 目　　次

第1章　序　論..... 1

第2章　調査成果..... 2

第3章　総　括..... 5

## 図　　版

# 第1章 序論

## 1 調査にいたる経緯

**中屋遺跡の概要** 中屋遺跡は浜松市浜北区根堅に所在する古代から近世にわたる遺跡である。第二東名建設に先立ち、2000年に行われた確認調査により遺跡の存在が明らかとなった。以後、静岡県埋蔵文化財調査研究所によって7回にわたり第二東名関連調査が行なわれている（静文研 2010）。調査の結果、東西約160mの方形区画溝と土壙基底部が検出され、溝内からは山茶碗や瓦が出土した。中でもSR8001より出土した螺鈿鞍は鎌倉時代の完全な形を保つ鞍として国内初の出土であり、全国的に大きく注目された。また、旧浜北市教育委員会によって区画溝は南北に約210mの規模である事が確認された（浜北市教委 2003）。2011年には浜松市教育委員会による工事立会が行なわれ、東側の区画溝が従来の推定よりも若干西へ振ることが判明した。

**調査に至る経緯** 2011年、KDDI株式会社より携帯電話無線基地局の新設工事が計画された。開発区域は周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、第二東名建設に伴い調査された静岡県埋蔵文化財調査研究所による調査区の隣接地であることから、遺跡の連続が想定された。よって原因者であるKDDI株式会社と浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）により協議がなされた。その結果、掘



Fig.1 中屋遺跡周辺の調査状況

削工事部分について本発掘調査を実施することとなった。発掘調査は浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が行なった。現地調査は2011年9月26日から9月28日まで実施した。

## 2 遺跡をめぐる環境

**立地環境** 中屋遺跡は浜松市浜北区の天竜川西岸に立地する。北側には丘陵が広がり、南北方向の開析谷によって形成された小規模な扇状地上に立地しており、周辺よりやや高い段丘上に存在する。調査区周辺の現状は畑及び住宅地である。北および西側が高く東側へ向かって傾斜しており、東側の低地部には河川が流れている。

**歴史的環境** 根堅遺跡で旧石器時代の人骨が2体見つかっていることから、人びとの活動が古くよりうかがえる地域である。以後、当地域には人びとが居住した痕跡がみられる。奈良・平安時代には篠場瓦窯、東ノ谷瓦窯、吉名古窯、大屋敷古窯などの生産遺跡が数多く分布する。一大生産拠点として機能していたと考えられ、生産の統制支配を行なっていた地元の有力層の存在も推定できる。また近隣に所在する岩水寺は行基創建の伝承を持つ。中世について、詳細な状況は不明であるが『遠江国風土記伝』によると、中屋遺跡周辺には赤佐荘が存在していたと伝わる。また周辺には、芝本遺跡、泉墳墓群、勝栗山墳墓群、中坊遺跡、北谷遺跡などの集落や墓域が展開する。

## 第2章 調査成果

## 1 檢出遺構

**遺跡の地形と層位** 本調査地点は現在畑であり、東側より一段高く立地する。調査地点の約30m南側では、第二東名建設に伴い静岡県埋蔵文化財調査研究所により調査が行われている。調査の結果



Fig.2 中屋遺跡周辺の遺跡分布

果、東西方向に約160mの規模を持ち、両端が北側へL字状に屈曲する方形区画溝が検出されており、本調査地点は方形区画内と捉えられる。調査地点周辺では、土師器や陶磁器が表採されるものの碎片が多いことから、後世の耕作により搅拌された結果と考えられる。

9次調査の基本層位（Fig.5）は上から表土、明茶褐色粘質土（1層）、黄褐色砂礫（2層）、暗黃褐色砂礫（3層）、暗黃褐色粘質土（4層）、明黃褐色粘質土（5層）である。遺構は上下2面で確認できた。

**調査区の設定** 調査地点は畑の中央北側に位置する。調査区は大小の四角形をつなぎ合わせたようなT字状を呈しており、北側は約4.7m、南側は約2.5m、南北に約6.8mの規模である。なお測量にあたっては、依頼者より提供された世界測地系座標値を使用した。

**検出遺構の概要** 調査区内の地形は、北側が高く南側へ傾斜している。調査では人為的に整地されたと推定される盛土を検出し、13基の小穴群が確認できた。遺構は整地層を挟む形で上下2面が検出され、多くが調査区の南側に偏在している。

**第一面の様相**（Fig.3） 表土直下で検出され、遺構は基本層位1層を掘り込み形成されている。地表面からの深さは約20cmである。遺構は11基の小穴が存在し、調査区南側のみで確認された。小穴の直径は20～50cmであり、埋土は黒褐色粘質土や暗灰色粘質土であった。遺物は出土しなかったが、根固め石と思われる石ならびに柱痕と考えられる様子が捉えられた。小穴群の多くは建造物を構成すると考えられるが、調査範囲が狭く建物等の規模を推定するには至らなかった。土器等の遺物は見られない。

**SP04**（Fig.4） 調査区南壁に接する形で検出され、約半分は調査区外である。基本層位1層を約40cm掘削している。埋土は

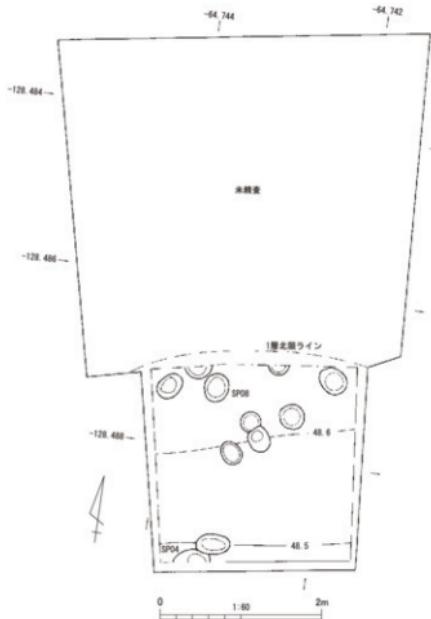


Fig.3 第一面全体図

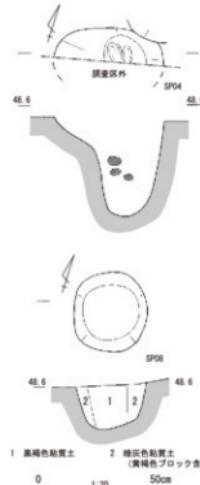


Fig.4 SP04-08 実測図

黒褐色粘質土（Fig.5 - I 層）であり、検出面下約 20cm で根固め石と考えられる自然石が 3 つ、南北方向に並べられていた。土器等の遺物は見られない。

**SP08** (Fig.4) 調査区中ほどどのやや西よりで検出された。基本層位 1 層を約 20cm 挖削している。Fig.4-1 層が柱痕と考えられ、Fig.4-2 層は黄褐色ブロックが混入している。なお、遺物は出土していない。

**整地層** (Fig.5) 調査区のほぼ全体において基本層位 2 層及び基本層位 3 層の砂礫層を検出した。堆積は南方向へ徐々に深くなる。深さは 20 ~ 50cm である。砂礫層内には、表土層の混入が見られず砂礫のみが充填されていたため、近世以降の耕作に伴うものではないと考えられる。締まりは弱く版築等の痕跡は確認できない。造成時期については、遺物が出土していないことから詳細な

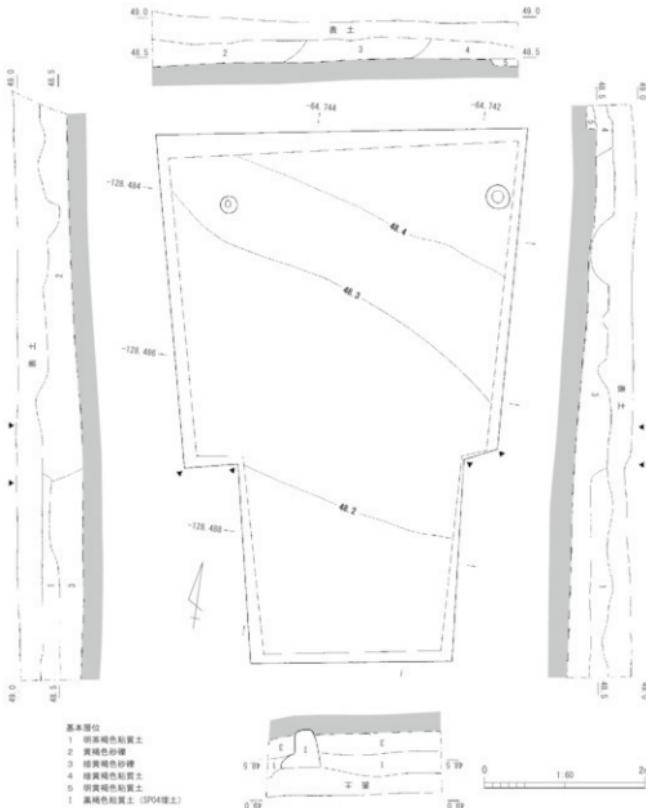


Fig.5 第二面全体図

年代は不明である。また、調査区南端から北側 2.7m 付近までの範囲のみに基本層位 1 層の広がりを確認した。砂礫層直上で検出され、20 ~ 30cm の厚みを持つ。しかし遺物は、1 層直上で土師器皿 (Fig.6-1) が出土したのみであり、造成時期については下限が中世と推定できるだけで明確ではない。

**第二面の様相** (Fig.5) 基本層位 2 層及び基本層位 3 層除去後に検出され、地表面からの深さは 50 ~ 80cm であった。遺構は基本層位 5 層を掘り込み形成される。2 基の小穴が検出され、両者ともに調査区北側に存在する。埋土は茶褐色粘質土であり、第一面とは時期が異なる。遺物は確認されなかった。

## 2 出土遺物

調査で出土した遺物は碎片が多く、図化できたのは以下の 3 点のみである。

**調査区出土遺物** (Fig.6) 1 は表土掘削中に出土した。第一面直上で確認された遺物である。土師器皿の口縁部と考えられる。明茶褐色を呈し内部にはナデと思われる痕跡が認められる。時期については中世の所産と考えられる。

**表採遺物** (Fig.6) 2 および 3 は表採されたものである。2 は青磁鍋連弁文碗である。山本分類 (山本 1995) の IV 類と考えられ、13 世紀前半に収まる。

3 は山茶碗である。高台にモミ痕が観察できる。渥美・湖西産であり、12 世紀に位置づけられる。

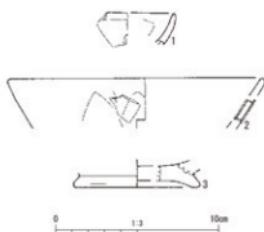


Fig.6 出土遺物

## 第3章 総 括

**調査結果の概要** 今回行なった中屋遺跡 9 次調査では、中世の小穴 11 基と、中世以前と考えられる時期不明の小穴 2 基を検出した。また、造成時期の下限が中世と考えられる整地層が確認された。遺物は表土掘削中に中世土器が数点出土したほかは表採によるものである。中世土器は後世の耕作により攪拌されたものと考えられ、近世土器は開墾などの活動に伴うものと考えられる。

**中世の小穴群** 第一面で検出された 11 基の小穴群については、柱痕や根固め石と思われる石が確認されたものもあるため、多くは建造物を構成していると考えられる。しかし、調査範囲が狭く建物等の規模を推定するには至らなかった。調査区中ほどにおいて半裁状態で捉えられた 2 穴については、間隔が約 1m であり小穴群の北限を規定する柵列の可能性がある。

**整地層について** 人為的な盛土と推定された整地層は、大きく二層に分かれる。上層である基本層位 1 層の範囲は、東西壁面の観察から中世小穴群の範囲と重複すると推定される。よって 1 層は

建造物構築に伴う地盤強化もしくは化粧土の役割を推定することができる。比較的深く掘り込まれたSP04では、根石の標高と下層である基本層位3層上面の標高が一致する。一度は1層を掘り抜いたため3層では強度が不十分となり、根石を建物築造時に基盤の補強目的として充填したと考えられることから、基盤強化の傍証ともなり得る。

また、両整地層の関係については、1層が3層を掘り込むような形で充填されていることから、以下の2つの可能性が想定できる。①3層形成の後、表面の窪み部分もしくは3層を一部削平して1層を構築する場合と、②3層構築途中に1層を造成した可能性である。前者では1層と3層の構築時期にヒアタスが存在し、後者では一連の土木行為として同時に造成されたと考えられる。

**結語** 本調査対象地は、方形区画内に相当する。中世前期において、中屋遺跡の土壘を伴う方形区画は全国屈指の規模を持つものである。しかし、過去の調査では区画内の南端部分が調査されたのみであり、その他の部分の面的調査は行なわれておらず、方形区画の性格を含め区画内の詳細は明らかとなっていない。今回の調査では、整地層の検出によって区画内における土木行為の一端を捉えられた事がもっとも大きい成果である。しかし、整地層内からは遺物が全く出土せず、調査範囲が限られていたこともあり不明な点も多い。整地層の広がりや人為的作事の可否を含めた詳細は、今後の調査の進展により明らかになる事を期待するものである。

#### [参考文献]

- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『大門西遺跡・大平遺跡』  
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『中屋遺跡』  
(財) 浜松市文化振興財團 2005『村長平遺跡2次』  
(財) 浜松市文化振興財團 2009『鳥居松遺跡5次』  
(財) 浜松市文化振興財團 2009『北神宮寺遺跡』  
(財) 浜松市文化振興財團 2010『北神宮寺遺跡2次』  
(財) 浜松市文化振興財團 2011『木船廃寺跡2次』  
中井 均 1991「中世の居館・寺院そして集落—西国を中心として—」『中世の城と考古学』新人物往来社  
橋口定志 1988「中世方形館を巡る諸問題」『歴史評論』2 歴史科学協議会編集  
浜北市教育委員会 2003『中屋遺跡確認調査報告書』  
浜北市教育委員会 2005『北谷遺跡』  
浜北市史編さん委員会 2004『浜北市史資料編原始古代中世』  
松井一明 1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』No.25 静岡県考古学会  
山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁器」「概説中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編



1 調査区全景（北西から）

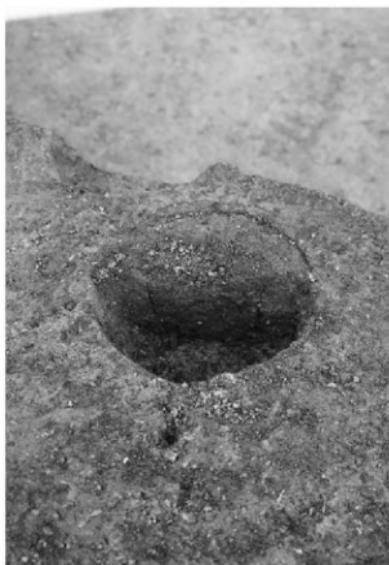


2 西壁断面（北東から）

PL.2



1 SP04 (北から)



2 SP08 (南から)



3 出土遺物

# 報告書抄録

書名(ふりがな)	中屋遺跡9次 (なかやいせき9じ)							
編著者名	首藤久士							
編集・発行機関	浜松市教育委員会 〒 430-0929 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市文化財課 (浜松市教育委員会の補助執行機関) 〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発行年月日	2011年10月31日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村		遺跡番号						
中屋遺跡	静岡県 浜松市浜北区 根堅	22202	06 01 83	34度 50分 23秒	137度 47分 32秒	2011年 9月26日 ～ 2011年 9月28日	22 m <sup>2</sup>	携帯電話無 線基地局新 設工事に伴 う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中屋遺跡	寺院? 集落	中世	小穴 整地層	土師器・陶 器・貿易陶 磁器	方形区画内において整地層を 確認した。			

北緯、東経は世界測地系の数値である

## 中屋遺跡9次

2011年10月31日

---

編集・発行機関 浜松市教育委員会

浜松市文化財課  
(教育委員会の補助執行機関)

〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2

---

印 刷 中部印刷株式会社